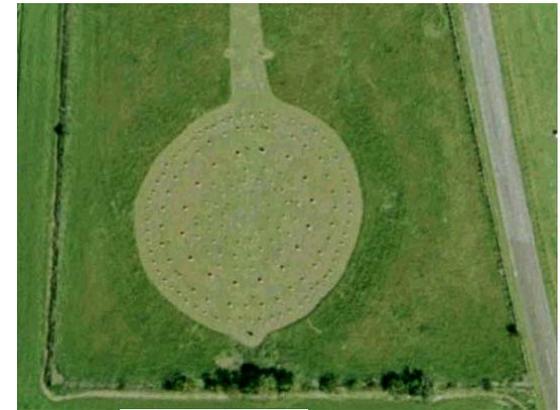


イギリスのストーンヘッジにも「死者の世界」と「生者の世界」をつなぐ祭礼の道があった
イギリス ソールズベリー平原の「ストーンヘンジ」と「ウッドヘンジ」

日本のストーンサークル検討に大きな影響を与えたストーンヘッジの最近の考え方をインターネットデータベースにレビューする

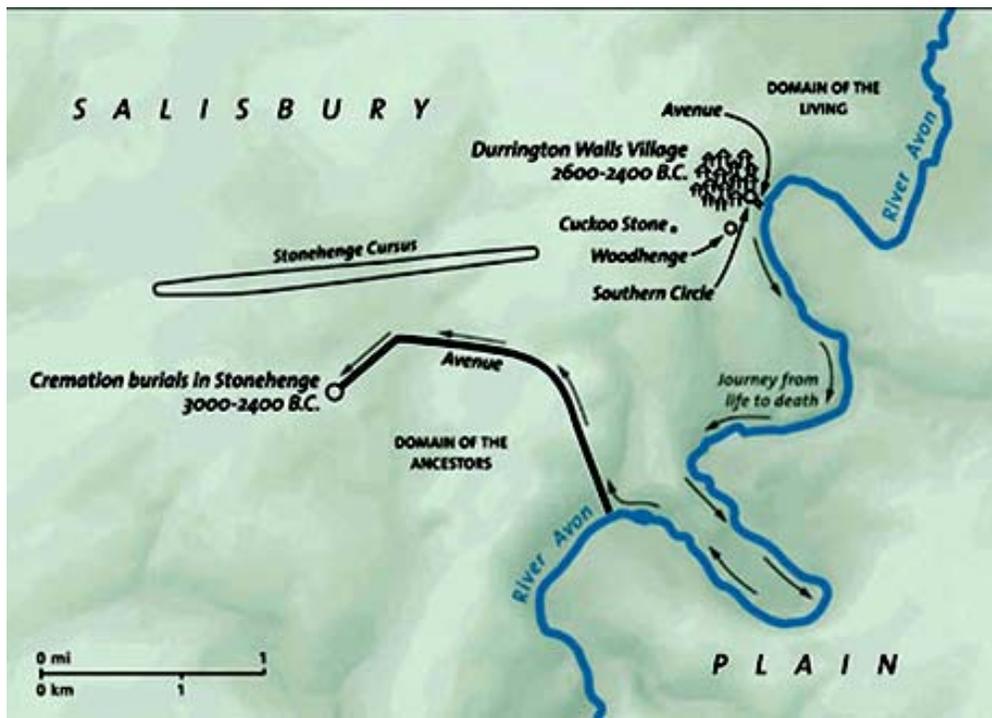




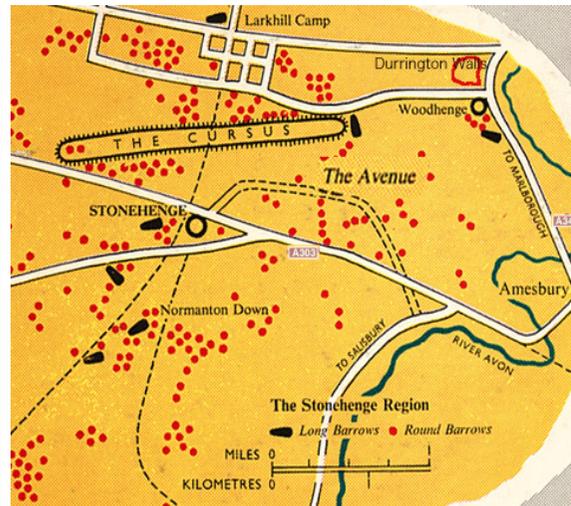
ウッドヘンジ



ストーンヘンジ



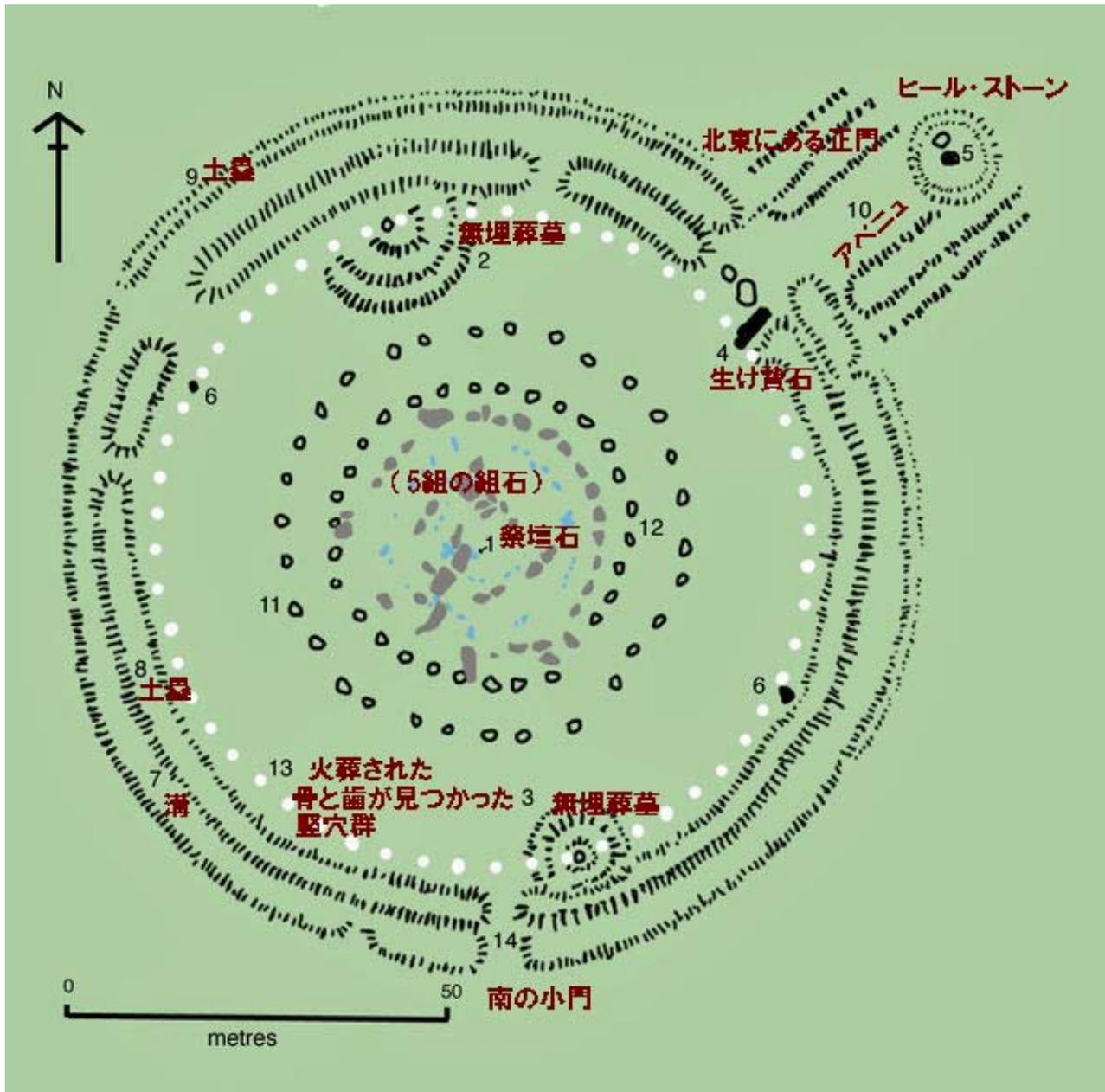
北東からストーンヘンジへ入る祭礼の道がぼんやりと見える



ウッドヘンジからストーンヘンジへと続く祭礼の道
生の空間から死者の空間へ



ウッドヘンジの北に環状の集落が浮かび上がって見える
この集落の人がストーンヘンジ・ウッドヘンジを作った



サークルの中心から北東にある
Heel Stone=ヒール・ストーンを見たところ。



遺跡の中から7月中旬の朝日を見た様子。



ソールズベリー平原に残るストーンヘンジは、先史時代の巨石文化のシンボルともいえる存在だ。最も有名なストーンサークルともいえるが、その構造は他のものと大きく異なる。これはストーンサークルというよりも円形に並べられた石柱上に横石を乗せて組み合わせた堅牢な建造物であり、似たものは他にない。用途には諸説あるが、おそらく宗教的な儀式、祭典の場だったと考えられる。ストーンヘンジは紀元前 3000 年ころから紀元前 1700-1600 年ころまで、大きく分けて 3 段階を経て現在のような形に作り上げられた。まず新石器時代に円形の堀と土手が作られた。これは現在もほぼ同じものが残っている。円周上にはオーブリー坑と呼ばれる穴が等間隔に掘られ、そこに木の柱が立てられたと考えられている。紀元前 2900 年から 2600 年ころには何らかの木造建築物が作られていたと見られ、柱の穴が数多く残っている。最終段階である巨石構造物の築造は紀元前 2600 年ころから始まり、紀元前 1600 年ころまで続いた。まず、ブルー・ストーンと呼ばれる長さ 2m ほどの岩が弧を描いて並べられた。この岩は南西ウェールズのプレセリ山から実に 400 キロ近い距離をおそらく海路を使ってはるばる運ばれたと考えられている。現在残っている主な部分である巨石のサークルの築造が始まったのはさらに 2、300 年後で、サーセン石と呼ばれる平均約 25 トンの巨石は近郊のマールボロから運ばれた。立石と上の横石はほぼ穴に突起をかませる方法でしっかりと固定され、並んだ横石同士はさねはぎ式という、溝と突起を合わせる方法でそれぞれしっかりと連結されている。



東方向から遺跡を見た様子。数千年の間に岩は倒れ、あるいは破壊されたが、完成時には等間隔に並んだ石柱の上に横石が隙間なく並び、リング状の構造になっていた。サークルの周囲は現在も円形の堀に囲まれており、これは最も古い段階につくられたものとほぼ同じものが残っている。



立石の上に乗った横石同士はそれぞれに彫られた溝と突起によってぴったりとかみ合わされている。サーセン石は非常に硬い岩で、加工は同じ岩のボール状の石器で行われた。



サークルの中心から北東にある Heel Stone=ヒール・ストーンを見たところ。ストーンヘンジには北東方向から入る入り口があり、ヒール・ストーンはかつて対になって置かれていた門柱のような形だったとみられている。

入り口へは近くのエイヴォン川から延々と通路が続いており、現在もその痕跡が残っている。夏至の日の朝にはサークルの中から見ると丁度この入り口方向から日が昇る設計になっており、この施設を作った人々の世界観に結びついた構造とみられている。

ストーン・サークルの石の位置に関しては天文学的な現象と結びつける仮説が数多くあり、ストーンヘンジの石の配置も様々に論議されてきた。

60年代のホーキングの、「古代の天文観測所」という説は一世を風靡したが、必ずしも明確な根拠に基づいているとはいえ、遺跡の建造年代に関する認識にも致命的な誤りがあり、現在、支持者は少ない。

だが、この夏至の日の日の出のラインに沿った設計に関しては専門家でも異論を挟む者はいない。



外側に並ぶサーセン石と内側に並ぶ背の低いブルーストーンがよくわかる。ブルーストーンは初めは二重の半円、馬蹄状に並べられ、その後数度配置換えが行われている。最終的にブルーストーンは外側のサーセン石のサークルの内側に約60個のサークル、内側の三石塔のさらに内側に馬蹄形に19個並んでいたと見られているが、現在はほとんど原型をとどめていない。



サーセン石の外周の内側には二本の立石の上に横石を乗せた「三石塔」が5組立てられている。写真は三石塔を下から見上げたところ。三石塔の支柱の二対の岩は片方が直線的に、スムーズに形成されているのに対し、もう一方は表面の凹凸が目立つもののおおい。これを何らかのシンボルとして意図的になされたものとする仮説もある。



手前に立っているのが馬蹄形に配置されていたブルーストーン
その後ろが最も高いサーセン石の立石。

ブルーストーンの側面には溝が彫られていて、かつては隣の岩と凹凸を組み合わせでぴったりと並べられていたと考えられている。後ろのサーセン石の上部の突起はこの上に乗っていた横石に掘られた凹みにはめ込んで固定するためのもの。すべての立石と横石はこうした凹凸によってきちりと組み合わせられていた。



手前が外周のリングでその向こうに見えるのが三石塔。



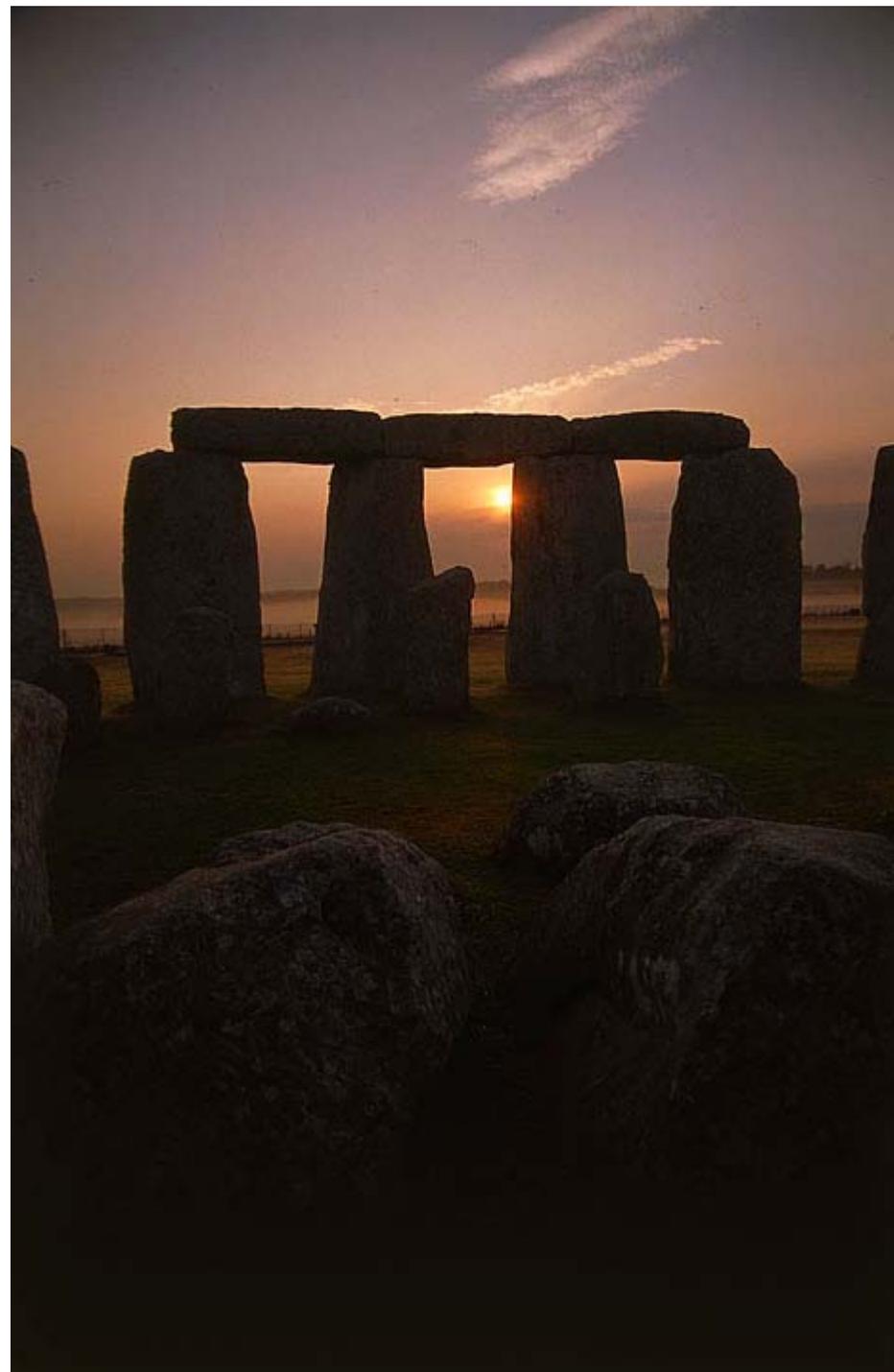
三石塔のひとつ。

立石の重さは50トン近くもある。
約30キロ北にあるマールボロー丘陵から木のコロとロープを使って運ばれたと考えられているが、ひとつの岩を運ぶのに約500-600人でも1年以上かかったという試算も



サークルの北東にあるヒール・ストーン。

ストーンヘンジは悪魔が魔法使いマーリンに命じられて、アイルランドから一夜で運んで来たという伝説がある。一夜にして巨大な石組みが出現したら、皆さぞ驚くだろうと悦に入る悪魔の様子を一人の修道士が見ていた。逃げる修道士に悪魔が岩を投げつけ、かかとを砕いたという言い伝えから、この名になっている。ヘンジ内の岩がすべて形成、加工されたものであるのに対し、この岩は手を加えられていないように見える。



遺跡の中から7月中旬の朝日を見た様子。



サークルの中心から北東にある Heel Stone=ヒール・ストーンを見たところ。



遺跡を北側から見た様子。現在は特別な許可がないと中には入れない。



南西方向から見た姿



南西方向からサークルを見た様子。こちら側の外周の石組みはほとんど失われている。



南側からの姿。手前の地面のくぼみが遺跡の外周の堀。



8月初旬の夕日。



8月初旬の夕暮れ。南西方向からの眺め。



サークルの外側、堀のすぐ内側にある「生け贄の石」からサークルを見た情景。

この岩は Heel Stone からサークルへと続く通路に 2 つ並んで立っていた岩のひとつで、倒れたままになっている。

生け贄を捧げるために置かれた岩ではないかと考えられた時代があり、この名がついた。



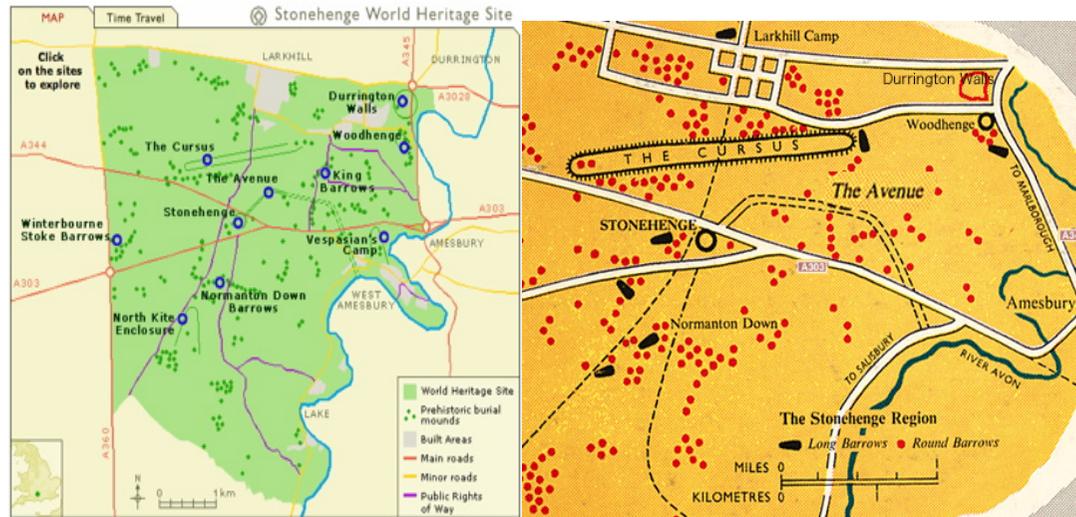
ウッドヘンジ

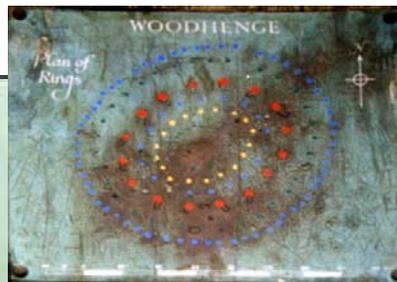
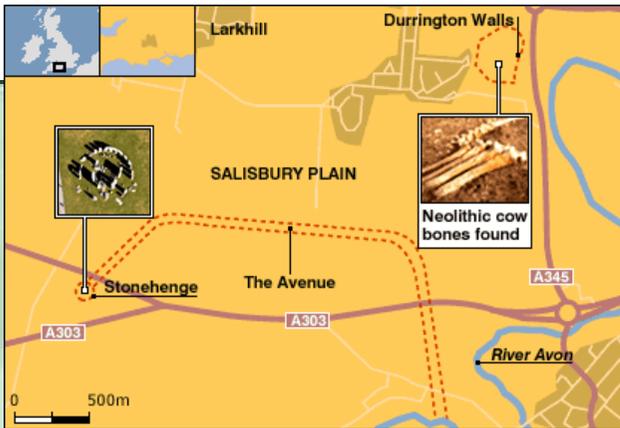


ストーンヘンジの北すぐ近くにある Cursus Barrows と呼ばれる円墳のグループ。

ストーンヘンジ周辺には [Woodhenge](#) など関連遺跡がいくつかある。

第三段階、巨石を組んだ時代の円形のマウンド状の墳墓(Round Barrow)も数多く残っており、当時の有力者の墓と見られている。





Durrington Walls Village
2600-2400 B.C.

Cuckoo Stone
Woodhenge
Southern Circle

Cremation burials in Stonehenge
3000-2400 B.C.



DOMAIN OF THE ANCESTORS



PLAIN





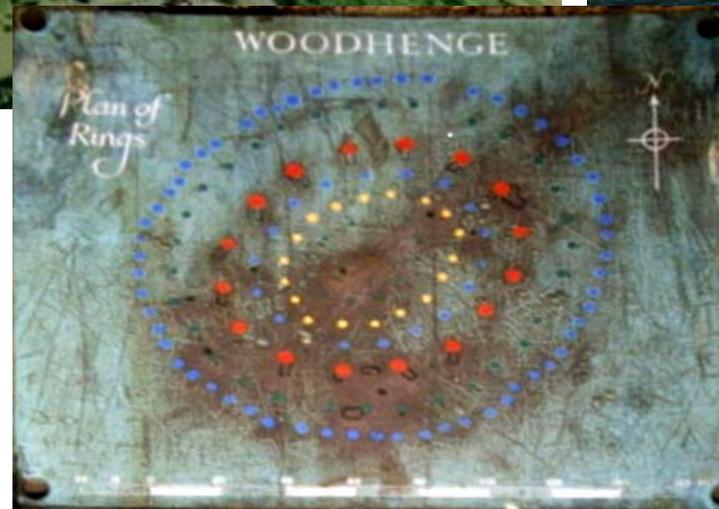
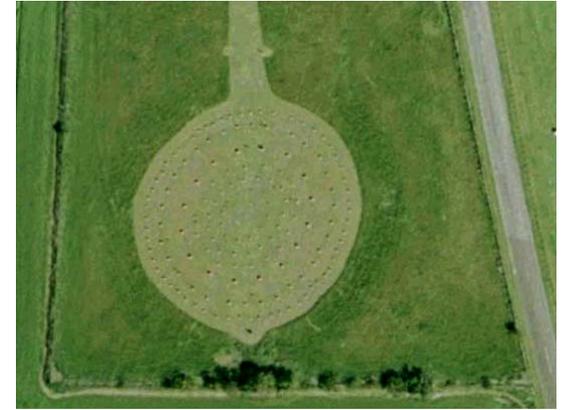
ダーリントン・ウォール環状遺跡



環状遺跡のすぐ西側で見つかった住居跡と祭祀住居



ダーリントン・ウォール
環状遺跡 最近の発掘現場



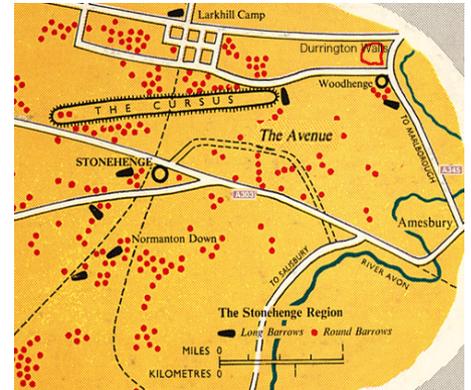
ダーリントン・ウォール
ウッド サークル

日の出の方向北東に
入口がある

英国のストーンヘンジ(巨石環状列石)の最近の調査から

日本・英国の環状列石のどちらもが、転生思想に基づく、先祖を祭る祭りの場との説が有力に

【要約】 ストーンヘンジは最近の研究から縄文のストーンサークルと同様 墓地だった



1. ストーンヘンジ(stonehenge):英国ロンドンから西に約200キロのソールズベリー平野にある欧州で最大規模の巨石記念碑。

円陣状に並んだ直立巨石とそれを囲む土塁からなる。新石器時代の紀元前2500年頃に造られたと考えられている。この遺跡とその周辺は、1986年にユネスコの世界遺産に登録され、ストーンヘンジ自体は英国が国家遺産として保護している。

- この時期は日本の縄文時代中期 三内丸山縄文遺跡と作られた頃である。イギリスにアングロサクソン・ゲルマン人が入ってくる前のケルトの祖先の遺産と考えられる。
- また、イギリスにはこのほか各地にストーンサークルや巨石遺構が残っており、これらの巨石に謎の渦巻き文様が残されている。時代はずっと下るが、ケルトの渦巻き文様として数々の遺物にこの渦巻き文様が受継がれてきた。



2. 最近 ストーンヘンジで見つかった骨を放射性炭素年代測定法での測定から ストーンヘンジは埋葬地だったことが明らかに

ストーンヘンジで見つかった骨を放射性炭素年代測定法で測定したところ、ストーンヘンジの建造が開始されたのと同様時期である紀元前3000年ほど前のものであることが判明した。同じ場所で他にも骨が見つかることから、建造物の完成後も紀元前2500年頃まで埋葬場所として使用されていた。このことからストーンヘンジは埋葬所であったことが明らかになった。

- ストーンヘンジは上流階級、おそらく古代の王族の埋葬場所として使われたと考えられている。ストーンヘンジに火葬で埋葬された人は240人にのぼると考えている。初期にはごくわずかな人しか埋葬されていなかったが、その後次第に増えていったことから、王族の子孫が増えるにつれて、埋葬地が一般化していったと考えている。
- ストーンヘンジのカーサス(ストーンヘンジを囲む、全長2マイル(約3.2km)ほどの2本の平行な溝)が、紀元前3630年～3375年にさかのぼることが判明した。死者の領域と生者の領域を分ける溝か……

3. ストーンヘンジから2マイル(約3.2km)ほどの北東の川岸 ダーリントンウォールでストーンヘンジ時代の集落跡発見

出土した牛の骨分析から ここでの祭りのため、季節的に巡礼者が集まった祭りのための集落と見られる

ストーンヘンジから2マイル(約3.2km)ほど離れた場所にあるダーリントンウォールの住居を発掘し、この村の人たちがストーンサークルを作ったと見られている。住居からは、石器、飾りピンのかげら、がれきそして、ベッドやタンスの形跡、楕円形の暖炉跡も見つかった。また、先史時代の牛の化石を分析した結果、古代のストーンヘンジでは、遠方の巡礼者が家畜を連れて集まり祝宴を開いていたことが判明したという。

- 研究チームは、牛の歯のエナメル質に残っていた化学元素ストロンチウムの原子の同位体を分析して、牛が生息していた地域に関する地質学的な情報を化学的に判断。「ストーンヘンジ周辺を含めイングランド南部は石灰岩を大量に含む白亜質の土壌が特徴的であるが、調査の結果、1頭を除いて、この土壌範囲以外の土地で飼育されていたことがわかった」そして、2頭の牛の歯は、イングランドの外部から

やって来たことを示したという。「この牛たちは、比較的古い岩盤上に形成された土壌 ウェールズやスコットランドで飼育されていた可能性が高く、ストーンヘンジ遺跡自体にウェールズ南西部から運ばれてきた青石が使われていることから、ウェールズから運ばれてきたと考えられる。また、豚の歯の分析からはほぼ生後9ヶ月の子豚が使われ、冬至の祭りがあったのでは・・・と。これらを総合すると この集落はある季節に限って人が住むために造られ、一方、ストーンヘンジは死者をまつために造られたと考えられ、ダーリントンウォールに近接する木で造られたウッドヘンジとストーンヘンジを結ぶ祭りの存在が浮かび上がる。

4. 集落跡発掘が語るウッドヘンジとストーンヘンジを結ぶ古代人の祭り

「ストーンヘンジとダーリントンウォールは同じ環状構造を持つ遺跡だが、一方は石造りの柱、もう一方は木柱とその素材が示すように意味合いは異なる。祖先崇拜を尊ぶ古代人にとって、木は生者の領域を象徴し、石は祖先の死者に結びつくものだ」最近ダーリントンで発見された先史時代の何百という住居跡は、特定の季節に限定された村で。

古代の巡礼者が冬至と夏至を祝うために訪れたと考えられるという。

- 先史時代のゴミ捨て場は、豚や牛の骨、壊れた陶器など、石器時代の祝宴の証拠にあふれている。
「巡礼者たちは出身地方ごとに村の中に割り当て区域を持っていた」とする新しい学説も発表されている。
「現時点までの研究はまだ断片的なものだが、陶器の種類が住居跡の区域ごとに異なっているように思われる。」
- ストーンヘンジ周辺はストーンヘンジばかりでなく、周辺に数多くの墓が点在する。死者の領域
一方 2条の溝の北側 ダーリントン周辺には墓がない。

2006年9月にイングランド南部にあるストーンヘンジの近くのダーリントンウォールで、先史時代の大規模な村落が発掘された。また、この村落の木柱サークルと巨大な土塁が、道路、川、祭儀を通じてストーンヘンジにつながっていたという新しい証拠も発見。この村落には有名なストーンヘンジ遺跡の建造者が住んでいたとみられ、同時に、村自体が大がかりな「祝祭」を催すための重要な儀式的場だったとしている。発掘されたこの新石器時代の村落は、英国で発見された中では最大の住居跡だ。

ダーリントンウォールはソールズベリー平原にある有名なストーンヘンジから 2.8 キロの場所に位置する「ヘンジ」と呼ばれる世界最大の環状土塁で、内部には巨大な木柱サークルが存在した。

今回の発掘によって、8棟の木造建物の跡が新たに発見され、さらに30棟近くの住居が識別されている。ストーンヘンジの初期のストーンサークル(サラセン石)は、放射性炭素測定によって紀元前2600~2500年前のものであることが判明している。発見された村落も「放射性炭素測定ではサラセン石が建造された時代とまったく同じ時期の村。

これまでに発掘された6棟の住居はそれぞれ広さ約23平方メートルで、木造の壁と粘土の床でできている。また、地面の輪郭から、いろいろと家具類(食器棚やベッドなど)があったことが認められた。土塁の西端で発見された残りの大きい2棟の建物は、共同体から離れて生活していたリーダーまたは祭司の住居だった可能性があるといい、内部にごみ類の痕跡がほとんど見当たらないことから、宗教儀式のための建物とも考えられている。

それ以外の主要住居群は、2005年に同チームによって発見された立派な石畳の通りに沿ってまとまっていた。

この石畳の通りは幅約27メートル、長さ約170メートルで、ダーリントンの巨大な木柱サークルとエイボン川をつないでいた。この通りに対応するように、エイボン川の下流とストーンヘンジを同様の通りが結んでいる。

2つの遺跡の間のこのような類似点は、これらの遺跡がもっと大規模な複合宗教施設の一部だったことを示しているという。人々は、重要な儀式があるときにはエイボン川を通過して2つの建造物の間を行き来したのだとみられている。

人々は英国南部のいたる場所から「祝祭のために」集まってきた。また、住居跡から出土した人間の歯を同位体分析しており、その結果から、さらに遠方からの訪問者も存在したことが明らかになるだろうという。

ダーリントンでの大祝祭が終わると、祖先の崇拜者は通りを進んでエイボン川に向かい、遺体を下流のストーンヘンジへと流した。エイボン川沿いでは、先史時代の火葬用の薪の痕跡が見つかっている。

このことは、祖先の崇拜者が徒歩または船でストーンヘンジに向かい、そこで死者を火葬して埋めたことを示唆しているとピアソン氏は付け加える。「つまるところ、ストーンヘンジは祖先の霊が帰る家だと考えられる」。

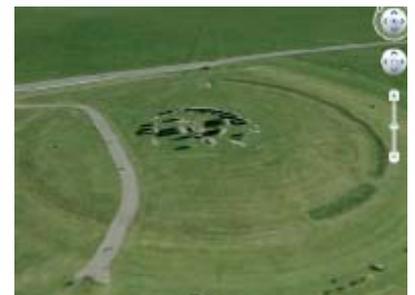
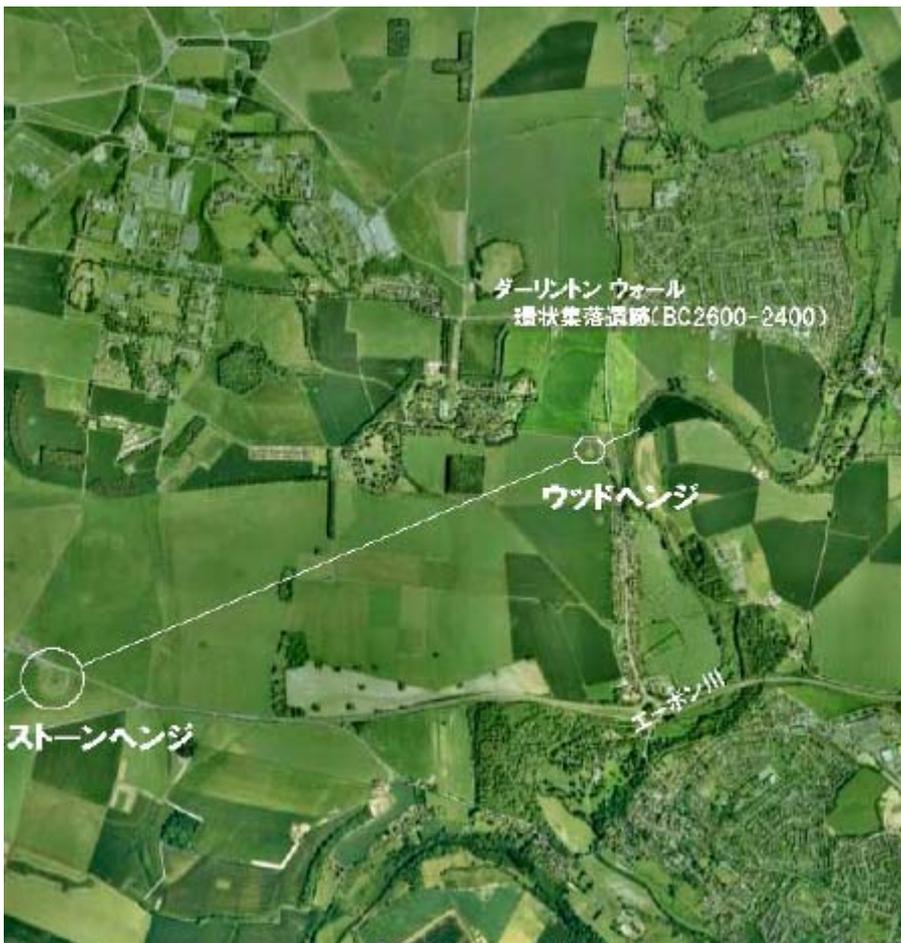
- 楕円形のウッドサークルの長軸は 夏至の日の出の方向 エイボン川の道がこの日の出方向に続く。
- ストーンサークル の入口はヒールストーン の立つ北東 夏至の日の出にはヒールストーン の蔭が中心に

英国のストーンヘンジ(巨石環状列石)の最近の調査から

日本・英国の環状列石のどちらもが、転生思想に基づき、先祖を祭る祭りの場との説が有力に



日本のストーンサークルが生まれた縄文中期とほぼ同じ時代にイギリス ソールズベリー平原に有名なストーンヘッジが作られた。このストーンヘンジ周辺発掘調査の新発見から、ストーンヘンジは祖先を祭る墓場 そしてすぐ近くのダーリントンウォールにはこのストーンサークルを作った人たちの環状集落と祭りの場ウッドヘンジがあるこの二つの施設を結んで、生者と死者たちを繋ぐ祭りが行われていたとの新しい説が有力に。



ストーンヘンジ



ウッドヘンジ



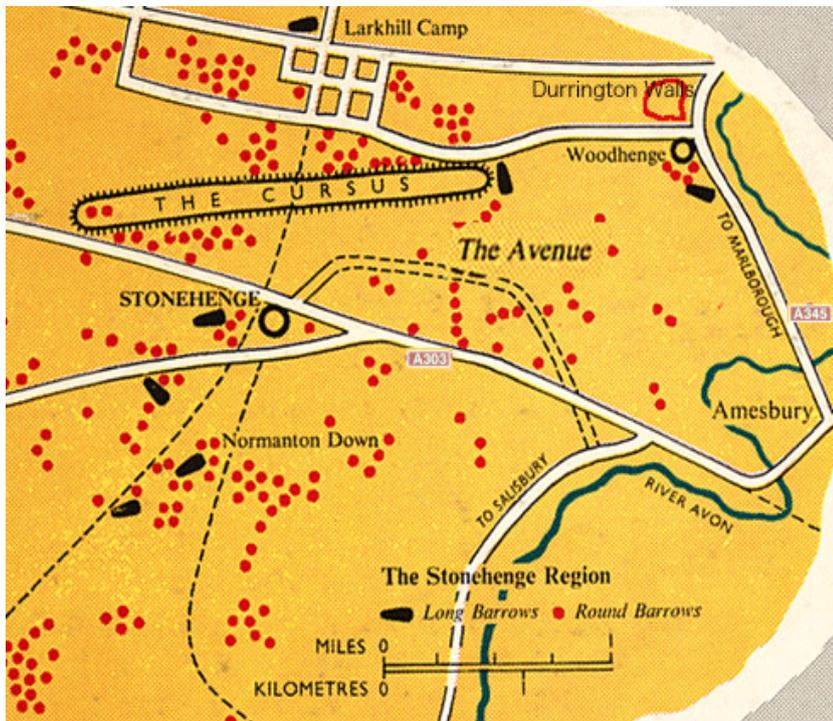
ダーリントンウォール環状集落

イギリス ソールズベリー平原「ストーンヘンジ」周辺関連遺跡図 google earth 衛星写真より

英国の有名な「ストーンヘンジ」いつ誰が何の為に造ったか?? はやくから「太陽」の運行 暦との関係などが研究され、先代の天文台説などが広く論じられてきたが、その目的は謎。そして日本の環状列石の見方にも大きな影響を与えてきた。最近 ストーンヘンジに埋葬された人骨の調査やこのストーンヘンジから3キロほど離れたダーリントンウォールで、このストーンヘンジを作った人たちの集落跡が発掘され、隣接するウッドヘンジとともに、このダーリントンウォールの集落・ウツ

ドヘンジとストーンヘンジとは密接につながった「生者と使者をつなぐ祭り」が行われていた複合遺跡で、ストーンヘッジはダーリントンウォールの集落の先祖たちの墓場であるとする説が有力になっているという。

縄文のストーンサークル及び縄文人の精神世界を考える上で、このストーンヘッジの新しい見方を知っておく事はきわめて有益と思われ、インターネット資料からそのレビューを集めましたので御紹介します。



ウッドヘンジ



ストーンヘンジ

1. ストーンヘンジ (ソールズベリー平原のストーンヘッジ)



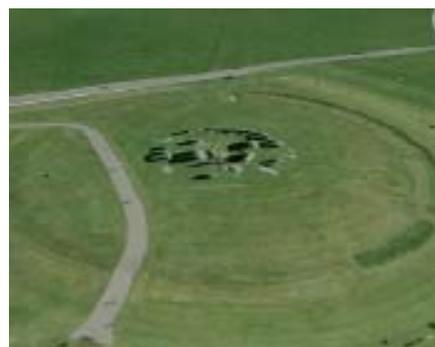
イギリス ソールズベリー平原にあるストーンヘンジ 紀元前 2500 年から紀元前 2000 年

ストーンヘンジ(Stonehenge)は、ロンドンから西に約 200km のイギリス南部・ソールズベリーから北西に 13km 程に位置する環状列石のこと。現在のイギリス人、アングロ・サクソン人がブリテン島に移住した時にはすでに存在していた。

ストーンヘンジは北緯 51 度 10 分 43.9 秒西経 1 度 49 分 6 秒 に所在する。



ストーンヘンジの遺構 想像図

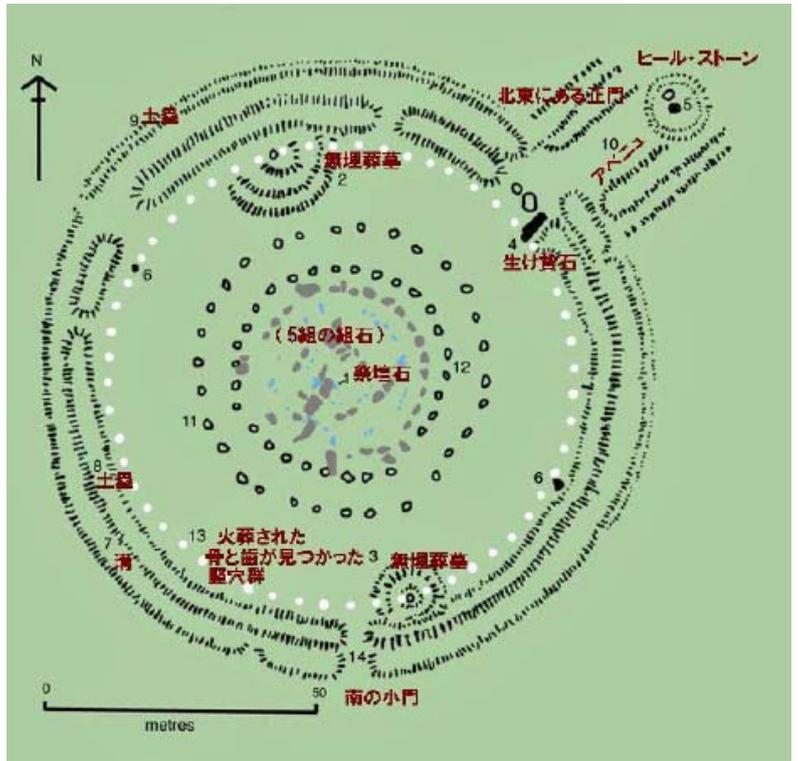


円陣状に並んだ直立巨石とそれを囲む土塁からなり、世界で最も有名な先史時代の遺跡。考古学者はこの直立巨石が紀元前 2500 年から紀元前 2000 年の間に立てられたと考えている。しかしそれを囲む土塁と堀は紀元前 3100 年頃まで遡るという。馬蹄形に配置された高さ 7m ほどの巨大な門の形の組石(トリリトン)5 組を中心に、直径約 100m の円形に高さ 4-5m の 30 個の立石(メンヒル)が配置されている。

夏至の日に、ヒール・ストーンと呼ばれる高さ 6m の玄武岩と、中心にある祭壇石を結ぶ直線上に太陽が昇ることから、設計者には天文学の高い知識があったのではないかと考えられている。

また、当時としては高度な技術が使われており、倒れないよう安定させるため石と石の間には凹凸がある。

遺跡の目的については、太陽崇拝の祭祀場、古代の天文台、ケルト民族のドルイド教徒の礼拝堂など、さまざまな説が唱えられているが、未だ結論はでない。



中心部の組石



ヒールストーンとサークルの中心から北東にあるヒールストーンを見る 外側に並ぶサーセン石と内側背の低いブルーストーン

この遺跡とその周辺は、1986 年にユネスコの世界遺産に加えられた。また、登録古代モニュメントとして法的に保護されている。ストーンヘンジ自体は英国の国家遺産として保有・管理されている。周辺はナショナル・トラストが保有している。

このストーンヘンジで見つかった骨を放射性炭素年代測定法で測定したところ、ストーンヘンジの建造が開始されたのと同様時期である紀元前 3000 年ほど前のものであることが判明した。同じ場所で他にも骨が見つかることから、建造物の完成後も紀

元前 2500 年頃まで埋葬場所として使用されていた。このことからストーンヘンジは埋葬所であったことが明らかになった。従来は、ストーンヘンジが埋葬地だったのは紀元前 2700～2600 年ごろの期間だけだと考えられてきたが、火葬された 3 人の遺骨に年代測定から、それらの遺骨が 500 年間にわたる長い年代にわたっていることが判明した。今回の年代測定の対象となったのは 1950 年代に発掘された遺骨だが、最も古い遺骨は火葬された骨と歯の集まりで、オーブリーホールと呼ばれる 56 個の竖穴の 1 つから発掘されたもの。2 番目に古い遺骨はストーンヘンジを囲む溝の中から見つかったもので、紀元前 2930～2870 年ごろに埋葬された大人の遺骨だという。溝の北側から出土した 3 番目の遺骨は、20 代の女性のものだと特定された。年代は紀元前 2570～2340 年ごろで、サラセン石という巨大な砂岩のブロックが立てられた時期に相当する。このように、それらの遺骨が 500 年間にわたる長い年代にわたっていることが判明。ストーンヘンジ完成後も紀元前 2500 年頃まで埋葬場所として使用され、ストーンヘンジは埋葬所であったことが明らかになった。

- ストーンヘンジは上流階級、おそらく古代の王族の埋葬場所として使われたと考えられている。
ストーンヘンジに火葬で埋葬された人は 240 人にのぼると考えられている。
ストーンヘンジ周辺はストーンヘンジばかりでなく、周辺に数多くの墓が点在し、初期にはごくわずかな人しか埋葬されていなかったが、その後 王族の子孫が増えるにつれて、埋葬地が一般化していった。

【ストーンヘンジ周辺は死者の領域 巨石はその象徴】

- ストーンヘンジのカーサス(ストーンヘンジを囲む全長 2 マイル(約 3.2km)ほどの 2 本の平行な溝)が、紀元前 3630 年～3375 年にさかのぼることが判明した。この 2 条の溝の北側 ダーリントン周辺には墓がない。

【ダーリントンウォール周辺は生者の領域 木はその象徴】

ストーンヘンジの北にあるこの二条の溝は 死者の領域と生者の領域を分ける溝だったのか……

- エイボン川の岸から ストーンヘンジの入口へ至る「The Avenue・道」が見つかった。
ウッドヘンジ・ダーリントンウォール環状集落からエイボン川への道が見つかっており、この二つの遺跡がエイボン川を介してつながる複合遺跡遺構と考えられている。

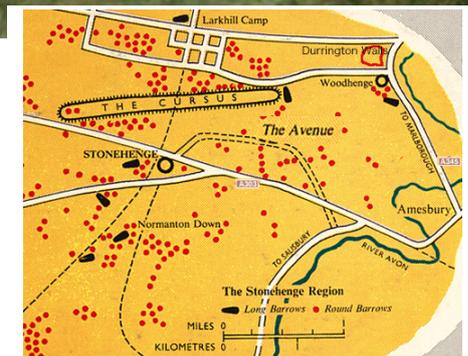
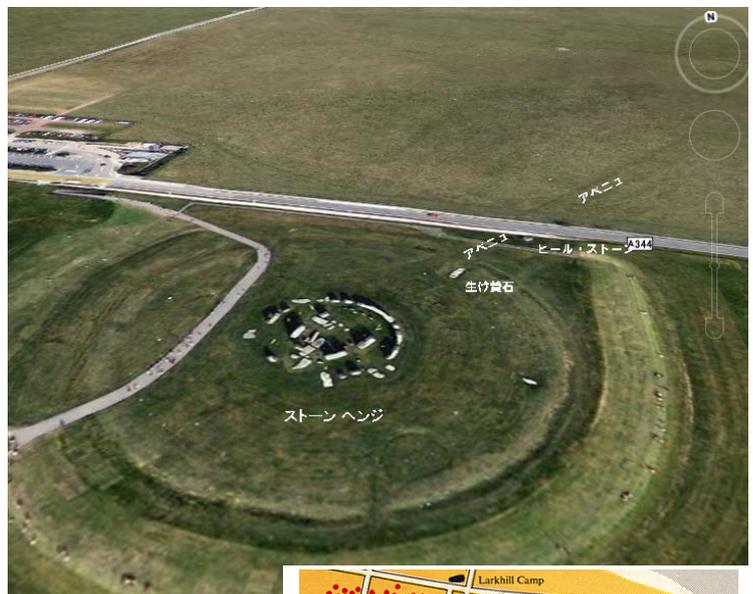
【転生思想に元づく死者と生者を繋ぐ祭りの存在が浮かび上がってきた】



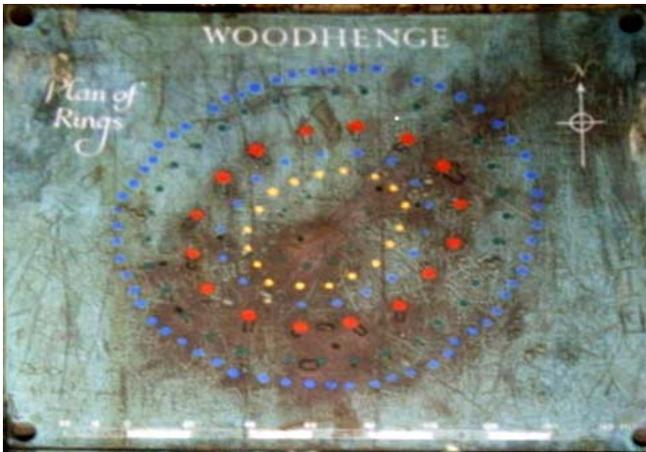
ストーンヘンジの北すぐ近くにある

Cursus Barrows と呼ばれる円墳のグループ

周辺には円形のマウンド状の墳墓(Round Barrow)も数多く残っており、当時の有力者の墓と見られている



2. ストーンヘンジから北東約3km エーボン川の岸 ダーリントンウォール環状集落遺跡に隣接するウッドヘンジ



ウッドヘンジ(木のヘンジ)の名前の由来は、元来ここにあった構造物が、ストーンヘンジに類似した木製の構造物だった事による。(現在 木柱のあった位置に背の低いコンクリート製の円柱が立ち並んでいる。)

このウッドヘンジは、青銅時代(紀元前 4 世紀～紀元前 1 世紀)に恐らく、宗教的な理由でここに建設されたと考えられている。現在ある コンクリートの標識は、オリジナルの木柱の位置を示しています。

また、上の平面図では、6 重の同心円を異なる色で示してある。

このリングは楕円形で、長軸方向(半径の最も長くなる方向)が、夏至の日出の方角を示している。

一番内側にある環の柱数は12本。2の環は18本。3の環も18本。4の環は1で本。5の環は33本。一番外側にある環の柱の数はで???本だ。直径50メートルぐらいで円形の環状の大きさから見るに、合計で157????本もの木柱が立てられていた。

上の平面図中、黒で示されているのは、これらの円に含まれない赤いコンクリート柱と中心近くの埋葬地。

このウッドヘンジの外側には、土手とその内側に堀があり、北東の方角からの土手道がこのウッドヘンジへの入り口となっている。

(ウッドヘンジ案内板より)



3. ダーリントン ウォール環状集落周辺の発掘による新発見

2006年9月にイングランド南部にあるストーンヘンジの近くのダーリントンウォールで、先史時代の大規模な村落が発掘され、その先史時代の何百という住居跡は、特定の季節に限定された村であったと考えられている。

また、この村落の木柱サークルと巨大な土塁が、道路、川、祭儀を通じてストーンヘンジにつながっていたという新しい証拠も発見。この村落には有名なストーンヘンジ遺跡の建造者が住んでいたとみられ、村自体が大がかりな「祝祭」を催すための重要な儀式的場だったとしている。

住居からは、石器、飾りピンのかけら、がれきそして、ベッドやタンスの形跡、楕円形の暖炉跡も見つかった。

また、先史時代のゴミ捨て場は、豚や牛の骨、壊れた陶器など、石器時代の祝宴の証拠にあふれており、出土した先史時代の牛の化石を分析した結果、古代のストーンヘンジでは、遠方の巡礼者が家畜を連れて集まり祝宴を開いていたことが判明したという。

また、「現時点までの研究はまだ断片的なものだが、陶器の種類が住居跡の区域ごとに異なっているように思われる」と。

巡礼者が冬至と夏至を祝うためにこの地に生け贄となる家畜とともにこの地を訪れたのだという。

- 研究チームは、牛の歯のエナメル質に残っていた化学元素ストロンチウムの原子の同位体を分析して、牛が生息していた地域に関する地質学的な情報を化学的に判断。

「ストーンヘンジ周辺を含めイングランド南部は石灰岩を大量に含む白亜質の土壌が特徴的であるが、調査の結果、1頭を除いて、この土壌範囲以外の土地で飼育されていたことがわかった」そして、2頭の牛の歯は、イングランドの外部からやって来たことを示したという。「この牛たちは、比較的古い岩盤上に形成された土壌 ウェールズやスコットランドで飼育されていた可能性が高く、ストーンヘンジ遺跡自体にウェールズ南西部から運ばれてきた青石が使われていることから、ウェールズから運ばれてきたと考えられる。

また、豚の歯の分析からはほぼ生後9ヶ月の子豚が使われ、冬至の祭りがあったのでは・・・と。

この集落はある季節に限って人が住むために造られ、一方、ストーンヘンジは死者をまつるために造られたと考えられ、ダーリントンウォールに近接する木で造られたウッドヘンジとストーンヘンジを結ぶ祭りの存在が浮かび上がる。



ストーンヘンジ世界遺産地区にあるダーリントン・ウォール遺跡で作業をする考古学者たち。

写真の前面には、かすかに四角形の形をした小さな家の跡があり、炉の跡が中心に見える。

写真後方に穴が線状にいくつも並んでいるのは、かつて住居を囲んでいたもの。この住居跡は、2006年に発見された他の多数の住居跡からは離れた場所であり、おそらく聖職者が利用していたものと思われる。



ダーリントン・ウォール遺跡にある新石器時代の住居で、土の床を考古学者らが掘り起こした。これらの住居には、ストーンヘンジを造った人たちが居住していた。写真右上の住居跡は、道の跡を横切っていて、火打ち石や折れた骨、陶器のかけらなどが残っていた。

この道は、ダーリントン・ウォール遺跡で祭りをを行った人たちが利用したと考えられている。彼らは葬送の儀式の最後の段階で、死者の遺骨をエーボン川に流した。この調査は、ナショナル ジオグラフィック協会が支援している。



「ストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクト」調査で発見された新石器時代の牛の骨。祭りの後の残骸と見られる。

ストーンヘンジ世界遺産地域にあるダーリントン・ウォール遺跡で大量に発見された動物の骨は、4600年ほど前にここで祭りをを行った人たちが残したものだ。

4. ダーリントンウォール・ウッド サークルとストーン サークルを結ぶ先史の時代の人々の祭り

ダーリントンウォールはソールズベリー平原にある有名なストーンヘンジから2.8キロの場所に位置する「ヘンジ」と呼ばれる世界最大の環状土塁で、内部には巨大な木柱サークルが存在した。

今回の発掘によって、8棟の木造建物の跡が新たに発見され、さらに30棟近くの住居が識別されている。

ストーンヘンジの初期のストーンサークル(サラセン石)は、放射性炭素測定によって紀元前2600~2500年前のものであることが判明している。発見された村落も放射性炭素測定ではサラセン石が建造された時代とまったく同じ時期の村。

これまでに発掘された6棟の住居はそれぞれ広さ約23平方メートルで、木造の壁と粘土の床でできている。また、地面の輪郭から、いろいろと家具類(食器棚やベッドなど)があったことが認められた。土塁の西端で発見された残りの大きい2棟の建物は、共同体から離れて生活していたリーダーまたは祭司の住居だった可能性があるといい、内部にごみ類の痕跡がほとんど見当たらないことから、宗教儀式のための建物とも考えられている。

それ以外の主要住居群は、2005年に同チームによって発見された立派な石畳の通りに沿ってまとまっていた。

この石畳の通りは幅約27メートル、長さ約170メートルで、ダーリントンの巨大な木柱サークルとエイボン川をつないでいた。この通りに対応するように、エイボン川の下流とストーンヘンジを同様の通りが結んでいる。

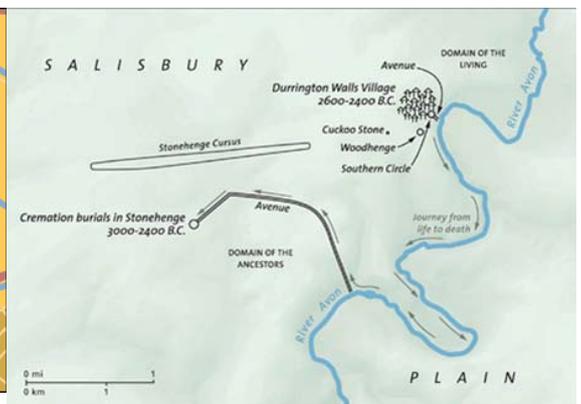
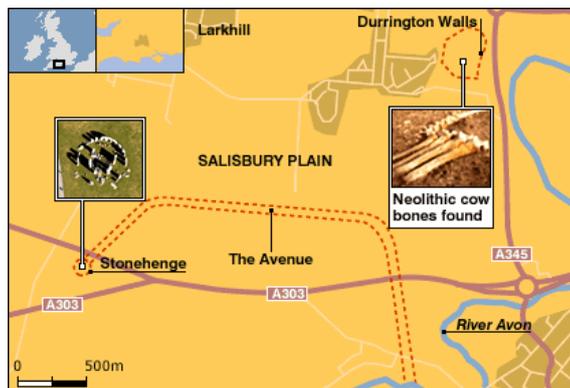
2つの遺跡の間のこのような類似点は、これらの遺跡がもっと大規模な複合宗教施設の一部だったことを示す。

人々は、重要な儀式があるときにはエイボン川を通過して2つの建造物の間を行き来したのだとみられている。

人々は英国南部のいたる場所から「祝祭のために」集まってきた。また、住居跡から出土した人間の歯を同位体分析しており、その結果から、さらに遠方からの訪問者も存在したことが明らかになるだろうという。ダーリントンでの大祝祭が終わると、祖先の崇拝者は通りを進んでエイボン川に向かい、遺体を下流のストーンヘンジへと流した。エイボン川沿いでは、先史時代の火葬用の薪の痕跡が見つかった。

このことは、祖先の崇拝者が徒歩または船でストーンヘンジに向かい、そこで死者を火葬して埋めたことを示唆しているとピアソン氏は付け加える。

「つまるところ、ストーンヘンジは祖先の霊が帰る家だと考えられる」。



【 参考 1. 】

フォトレポート:発掘で明らかになったストーンヘンジの謎 2008/06/05 07:00

文: Jennifer Guevin (CNET News.com) 翻訳校正:ラテックス・インターナショナル

<http://japan.cnet.com/news/biz/story/0,2000056020,20374428-4,00.htm>



最新の調査によれば、ストーンヘンジは 500 年以上もの間、墓地として使われていた可能性があるという。

これは、これまで考えられていたよりもずっと長い期間だ。

この新発見により、その特徴的な石(サルセン石)の配置が完了するずっと前から、埋葬場所として使われていたことも判明した。チームを率いたのはシェフィールド大学の考古学教授である Mike Parker Pearson 氏で、ナショナル

ルジオグラフィック協会の支援を受けて発掘が行われた。

これらの炭化した骨はストーンヘンジの埋葬場所から掘り出された。この場所で見つかった骨を放射性炭素年代測定法で測定したところ、この謎めいた歴史的建造物の建造が開始されたのと同様同時期である紀元前 3000 年ほど前のものであることが判明した。同じ場所で他にも骨が見つかることから、建造物の完成後も紀元前 2500 年頃まで埋葬場所として使用されていた可能性がある。発掘の責任者である Parker Pearson 教授は、「ストーンヘンジが使われていた時代、ここは主に墓地であったことが判明した。ストーンヘンジは、その最初から、最盛期を迎えた紀元前 3000 年代半ば頃まで埋葬場所だった。ストーンヘンジのサルセン石が完成した時代に見られる火葬による埋葬は、この遺跡が使われていた時代の後期に見られる多くの埋葬法の 1 つに過ぎないと考えられるが、それでも、ここが『死者の領域』として存在していたことを示している」と述べている。



今回のプロジェクトでは、古代の隣村の発掘も行われた。

考古学者たちは、ストーンヘンジから 2 マイル(約 3.2km)ほど離れた場所にあるダーリントンウォールの住居を発掘した。

住居からは、石器、飾りピンのかけら、がれきなどが見つかった。

また、ベッドやタンスの形跡、楕円形の暖炉跡も見つかった。

この人物が発掘責任者の Mike Parker Pearson 教授である。

今回のプロジェクトで調査された骨は 1950 年代に発掘されたものだが、ストーンヘンジの墓が放射性炭素年代測定法で測定されたのは今回が初めてである。

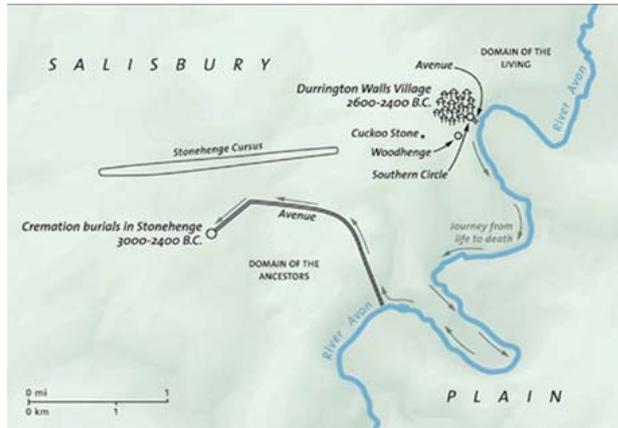
Parker Pearson 教授の同僚である Andrew Chamberlain 教授は、ストーンヘンジの墓は一般人用ではなかったと述べている。

同教授は、ストーンヘンジは上流階級、おそらく古代の王族の埋葬場所として使われたと考えている。

考古学者たちは、ストーンヘンジに火葬で埋葬された人は 240 人にのぼると考えている。初期にはごくわずかな人しか埋葬されていなかったが、その後次第に増えていったことから、Chamberlain 教授は、王族の子孫が増えるにつれて、埋葬地が一般化していったと考えている。



この地図には、ストーン
 ングランドのソールズベリ
 研究者たちの主な説によ
 を発掘した)ダーリントンウ
 て人が住むために造られ、
 ために造られたという。
 ダーリントンウォールに近
 られている点を除けばスト
 ーンヘンジに非常によく似
 た遺跡だ。



また、このプロジェクトでは、ストーンヘンジのカーサス(ストーンヘンジを囲む、全長 2 マイル(約 3.2km)ほどの 2 本の平行な溝)が、紀元前 3630 年～3375 年にさかのぼることが判明した。

ヘンジ周辺のより広範囲な地域、イ
 ー近辺までが掲載されている。
 れば、(考古学者たちが複数の住居
 オール近辺の集落はある季節に限っ
 一方、ストーンヘンジは死者をまつ

い場所にあるウッドヘンジは、木で造

これはストーンヘンジ遺跡の地
 図である。たくさんの骨と歯が、
 周囲に 56 カ所あるオーブリー
 ホールから発掘された。

【 参考 2. 】

インターネット メール マガジン より



http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=62359357&expand

1. 巨石遺跡ストーンヘンジは埋葬地だった？

イングランド南部にある古代巨石遺跡のストーンヘンジは、数世紀の間、死者を祭る巨大な埋葬地であったことが、放射性炭素年代測定により明らかになった。ストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクトが行った新しい調査結果によると、ストーンヘンジはそもそも墓地として使われていたという。いまから 5000 年ほど前のことで、巨大な砂岩のブロックが立てられた時期よりも数世紀さかのぼることになる。今回分析された古代人の遺骨は、紀元前 3000 年ころから、巨石が最初に立てられた後の紀元前 2500 年ころまでにストーンヘンジに埋葬されたものだった。

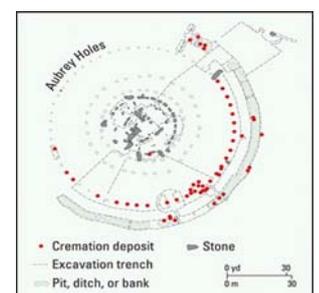


近郊の町エイムズベリーから眺めた夕間に浮かび上がるストーンヘンジ (ナショナル ジオグラフィック本誌 2008 年 6 月号掲載記事より)。

従来は、ストーンヘンジが埋葬地だったのは紀元前 2700～2600 年ころの期間だけだと考えられてきたが、火葬された 3 人の遺骨に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、それらの遺骨が 500 年間にわたる長い年代にわたっていることが判明した。

今回の発見は、ストーンヘンジが祖先崇拝を行う古代ブリトン人にとって「死者を祭る場所」であったという推論を裏付けるものだ。

今回の年代測定の対象となったのは 1950 年代に発掘された遺骨だが、最も古い遺骨は火葬された骨と歯の集まりで、オーブリーホールと呼ばれる 56 個の竪穴の 1 つから発掘された。2 番目に古い遺骨はストーンヘンジを囲む溝の中から見つかったもので、紀元前 2930～2870 年ころに埋葬された大人の遺骨だという。溝の北側から出土した 3 番目の遺骨は、20 代の女性のものだと特定された。年代は紀元前 2570～2340 年ころで、サラセン石という巨大な砂岩のブロックが立てられた時期に相



当する。

今回の調査プロジェクトのリーダーであるシェフィールド大学のマイク・パーカー・ピアソン氏は「現在、ストーンヘンジが長期間、埋葬地として使われてきたことを解明する調査が進行中だ。推計では、主にオーブリーホールに全部で240人ほどが埋葬されている。この時代の英国では最大の墓地だろう」と述べている。

Photograph by Ken Geiger/National Geographic magazine

2. ストーンヘンジに集い祝宴を開く古代人

http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article_enlarge.php?file_id=76272775

James Owen in London for National Geographic News September 12, 2008



夜空の下でそびえ立つストーンヘンジ

2008年9月に発表された最新の研究によると、ストーンヘンジの近くで発掘された先史時代の牛の化石を分析した結果、古代のストーンヘンジでは、遠方の巡礼者が家畜を連れて集まり祝宴を開いていたことが判明したという。

イングランド南部のソールズベリー近郊にある巨石遺跡ストーンヘンジについては、古代人が遠く離れた場所から集まり重要な祝祭儀式を行っていたという学説があり、今回発掘された化石はこれを支持するものであるという。そのような祝祭は年によって開催される日が変わっていたと考えられている。

研究チームの一員でイギリス自然環境研究会議(NERC)のジェーン・エバンズ氏は、「宗教的な祝宴で食するために解体された牛は、はるかウェールズからやって来た可能性もある」と、今週リバプールで開催されたイギリス科学振興協会科学祭(British Association Festival of Science)で発表した。

今回の発見は、ストーンヘンジから3キロほど離れたダーリントンウォール遺跡にある石器時代後期の村で最近発掘された4500年前の牛の歯と骨に基づいている。「祝宴を開くため大勢の人がストーンヘンジ地方に移動して来たことを示す物証を手に入れた」とエバンズ氏は語る(ストーンヘンジに繋がる集落跡を発見)。

研究チームは、牛の歯のエナメル質に残っていた化学元素ストロンチウムの原子の同位体を分析した。原子を分析することにより、牛が生息していた地域に関する地質学的な情報が化学的に判断できる。「ストーンヘンジ周辺を含めイングランド南部は石灰岩を大量に含む白亜質の土壌が特徴的であるが、調査の結果、1頭を除いて、この土壌範囲以外の土地で飼育されていたことがわかった」とエバンズ氏は説明する。

そして、2頭の牛の歯は、イングランドの外部からやって来たことを示したという。エバンズ氏は「この牛たちは、比較的古い岩盤上に形成された土壌で飼育されていた。そのような岩盤は、ウェールズやスコットランドまで行かなければ見つからない。この2カ所の

うち、ウェールズの方が可能性が高い。ストーンヘンジに近く、ほかにも考古学的なつながりが確認されているからだ」と語る。例えば、ストーンヘンジ遺跡自体にウェールズ南西部から運ばれてきた青石が使われている。

今回の発見は、イギリスのシェフィールド大学の大学院生サラ・ヴァイナー氏の研究が基になっている。ヴァイナー氏の指導教官で動物考古学者のウンベルト・アルバレッラ氏は、「今回の化学分析は、先史時代の牛の出身地をピンポイントで示せるほど精密ではないが、ストーンヘンジ以外のイギリスのどこかから人々が家畜を連れてやって来たことは証明された。人々は、非常に広い範囲から集まっていた」と話す。

さらに、古代の村から出土した牛骨を調査したところ、生まれたばかりの子牛がいないことが判明した。「家畜を飼育している場所であれば、その子どもの骨が大量に見つかるはずだが、まったく見つからなかった。だから、ここは生産する場所ではなく消費する場所だったのだと考えられる。ここは特別な目的のための場所だったと言える。人々が集い、おそらく恐ろしいほどの量のごちそうを並べて祝宴を開いていたのだろう」とアルバレッラ氏は語る。

アルバレッラ氏の参加するストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクトのリーダーで考古学者のマイケル・パーカー・ピアソン氏は、「ストーンヘンジとダーリントンウォールは同じ環状構造を持つ遺跡だが、一方は石造りの柱、もう一方は木柱とその素材が示すように意味合いは異なる。祖先崇拜を尊ぶ古代ブリトン人にとって、木は生者の領域を象徴し、石は祖先の死者に結びつくものだ」と話す。

最近ダーリントンで発見された先史時代の何百という住居跡は、特定の季節に限定された村であったと考えられている。

古代多神教徒の巡礼者が冬至と夏至を祝うために訪れたのだという。

先史時代のゴミ捨て場は、豚や牛の骨、壊れた陶器など、石器時代の祝宴の証拠にあふれている。「巡礼者たちは出身地方ごとに村の中に割り当て区域を持っていた」とする新しい学説も発表されており、家畜の化石の研究がさらに進めば、この学説を支持するものとなるかもしれない。

「現時点までの研究はまだ断片的なものだが、陶器の種類が住居跡の区域ごとに異なっているように思われる。まだ仮説にすぎないが、牛の出身地から解明できるかもしれない」とアルバレッラ氏は語る。人の歯は火葬のために残っておらず、牛の歯が貴重な手掛かりなのだという。

3. ストーンヘンジに繋がる集落跡を発見

http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=90018

James Owen in London for National Geographic News January 30, 2007

ダーリントンウォールでの考古学者の発掘調査で、後期旧石器時代の住居の粘土の床が発見された。

ストーンヘンジの建造者が住んでいたのではないかと。

右上の住居跡は、燧石(すいせき)、骨片、および土器片が敷き詰められ、通り沿いの他の住居跡と区別される。

一部の考古学者の仮説では、ダーリントンの人々はその道を使ってエイボン川の近くまで旅し、その水に死者の遺体を沈めたという。

エイボン川がダーリントンをストーンヘンジに結びつける。

ストーンヘンジもまたエイボンへの道となっていたのだ。



イングランド南部にあるストーンヘンジの近くのダーリントンウォールで、先史時代の大規模な村落が発掘された。

また、この村落の木柱サークルと巨大な土塁が、道路、川、祭儀を通じてストーンヘンジにつながっていたという新しい証拠も発見された。考古学者によれば、この村落には有名なストーンヘンジ遺跡の建造者が住んでいたとみられ、同時に、村自体が大がかりな「祝祭」を催すための重要な儀式の場だったとしている。

2006年9月に発掘されたこの新石器時代の村落は、英国で発見された中では最大の住居跡だ。

ダーリントンウォールはソールズベリー平原にある有名なストーンヘンジから2.8キロの場所に位置する「ヘンジ」と呼ばれる世界最大の環状土塁で、内部には巨大な木柱サークルが存在した。

今回の発掘によって、8棟の木造建物の跡が新たに発見された。

ストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクトのリーダー、パーカー・ピアソン氏によれば、現場調査によってさらに30棟近くの住居が識別されていると言う。

ストーンヘンジの初期のストーンサークル(サラセン石)は、放射性炭素測定によって紀元前2600~2500年前のものであることが判明している。発見された村落は「放射性炭素測定ではサラセン石が建造された時代とまったく同じだ」とピアソン氏は語る。

これまでに発掘された6棟の住居はそれぞれ広さ約23平方メートルで、木造の壁と粘土の床でできている。

また、地面の輪郭から、いろいろと家具類(食器棚やベッドなど)があったことが認められた。プロジェクトチームによれば、土塁の西端で発見された残りの大きい2棟の建物は、共同体から離れて生活していたリーダーまたは祭司の住居だった可能性があるという。

また、内部にごみ類の痕跡がほとんど見当たらないことから、宗教儀式のための建物だったとも考えられている。

「神殿または祭儀用の建物だった可能性が高い」とマンチェスター大学のジュリアン・トーマス氏は語る。

それ以外の主要住居群は、2005年に同チームによって発見された立派な石畳の通りに沿ってまとまっていた。

この通りは幅約27メートル、長さ約170メートルで、ダーリントンの巨大な木柱サークルとエイボン川をつないでいた。

この通りに対応するように、エイボン川の下流とストーンヘンジを同様の通りが結んでいる。同チームによれば、2つの遺跡の間のこのような類似点は、これらの遺跡がもっと大規模な複合宗教施設の一部だったことを示しているという。人々は、重要な儀式があるときにはエイボン川を通過して2つの建造物の間を行き来したのだとみられている。

ピアソン氏によれば、人々は英国南部のいたる場所から「祝祭のために」集まってきた。

また、住居跡から出土した人間の歯を同位体分析しており、その結果から、さらに遠方からの訪問者も存在したことが明らかになるだろうという。

ピアソン氏の見解によれば、ダーリントンでの大祝祭が終わると、祖先の崇拝者は通りを進んでエイボン川に向かい、遺体を下流のストーンヘンジへと流した。

エイボン川沿いでは、先史時代の火葬用の薪の痕跡が見つかった。このことは、祖先の崇拝者が徒歩または船でストーンヘンジに向かい、そこで死者を火葬して埋めたことを示唆しているとピアソン氏は付け加える。「つまるところ、ストーンヘンジは祖先の霊が帰る家だと考えられる」。

Photograph by Adam Stanford/Aerial-Cam for National Geographic

【 参考 3. 】

紀元前 2600~2500 年頃の大規模な住居跡を発掘

ストーンヘンジを造った人々の住居跡を発見

2007年1月31日

<http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/news/20070131/gallery/index.shtml>

英国イングランドのソールズベリー平原にあるストーンヘンジ世界遺産地域のダーリントン・ウォールで、ナショナル ジオグラフィック協会が支援する発掘調査により、数百人規模が居住していたとみられる古代住居の跡が発掘されました。

調査を行った考古学者は、ストーンヘンジを造った人々の住居跡とみえています。

英国シェフィールド大学の考古学者マイク・パーカー・ピアソンは「磁気測定調査を行ったところ、調査を行った地域全体に住居が建ち並び、数多くの囲炉裏を確認しました。住居の床からは、箱形のベッドや、木製ドレッサーか食器棚の跡が発掘されています」と語っています。

これらの住居は、放射性炭素測定の結果、ストーンヘンジ遺跡が建造されたのと同じ紀元前2600~2500年のものでした。このことから、ダーリントン・ウォールで発掘された住居に住んでいた人たちがストーンヘンジ建造に関わっていたと結論づけました。

この住居跡は、これまで英国のブリテン島で見つかった新石器時代の住居では最大で、スコットランド沖にあるオークニー諸島では

同様の住居跡がいくつか見つっています。今回の発見によりストーンヘンジは単独で造られたのではなく、葬送の儀式に使われたより大きな宗教施設の一部だったという学説が裏付けられたと、パーカー・ピアソンは語っています。

ストーンヘンジ複合遺跡を構成するダーリントン・ウォール遺跡は、現在見つっているなかでは最大の環状遺跡で、周辺は土塁に囲まれていて、内側には堀がありました。これらは宗教的な祭りに用いられたとみられています。

直径およそ 420 メートルで、同心円状に巨大な木の柱が立っています。ダーリントン・ウォール遺跡は、ストーンヘンジから 3 キロ程度の場所に位置していて、これまで狭い範囲しか調査が行われていませんでした。

2006 年 9 月に、ナショナル ジオグラフィックの支援で行われた「ストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクト」という調査で、英国のパーカー・ピアソンら 6 人の考古学者で構成される調査隊は 8 カ所の住居跡を発掘しました。6 カ所の床面は良い状態で保存されています。それぞれの住居はおよそ 5 メートル四方で、床は粘土でつくられ、中心部には囲炉裏がありました。床や杭穴、溝からは 4600 年前に使われていた木製の家具の一部が見つっています。

ダーリントン・ウォールの環状遺跡の西側では、調査隊のメンバーである英マンチェスター大学のジュリアン・トーマスが別の新石器時代の住居を 2 つ発見しました。いずれも木の柱と溝で囲まれていて、少なくともあと 3 つの同様の構造物が同じ地域にはあるとみられています。これらの住居は、ほかの住居から離れた場所にあり、共同体のリーダー的な存在だった人物が住んでいた可能性があります。

トーマスは、こうした宗教的儀式を執り行う人物は、共同体から離れて住んでいたと考えています。あるいは、これらの住居からはゴミ類が全くと言っていいほど見つっていないことから、宗教儀式に使われた神殿か祭儀のための建物で、内部の火を絶やさないようにするためだけに人がいて、居住はしていなかったのかもしれない。

残りの住居は、幅約 2.7 メートル、長さ 170 メートルほどもある立派な石畳の道の両側にまともまっています。これらの住居は、調査隊が 2005 年に発見して、2006 年に詳細な発掘を行いました。道は背の高い木の柱で囲まれた環状遺跡とエーボン川をつなぐもので、近くのストーンヘンジにも同様の道があり、人々が川を渡って二つの建造物の間を行き来したことを示しています。道の発見は、調査チームにとってストーンヘンジの遺跡群全体の目的を解明することに役立ちそうです。

パーカー・ピアソンは、ダーリントン・ウォール遺跡とストーンヘンジ遺跡との間には極めて密接な関係があったと考えています。ダーリントン・ウォール遺跡は生命を祝福するためのもので、死者を川に流して死後の世界に送り出す役割をもっていました。

一方でストーンヘンジ遺跡は、死者を記憶にとどめたり、葬儀を行うために造られました。

18 世紀に発見されたストーンヘンジ遺跡にある道は、夏至の日の出の方向と一直線をなしており、ダーリントン・ウォール遺跡の道は夏至の日没の方向に向かっています。

同様に、ダーリントン・ウォールの環状遺跡は冬至の日の出の方向を示しており、ストーンヘンジ遺跡の巨大な門の形をした 5 組の組石(トリリトン)は冬至の日没の方向を示しています。

ダーリントン・ウォール遺跡には、新石器時代にあらゆる地域の人々が集まり、大がかりな冬至の祭りが行われて、大量の食料を消費したと、パーカー・ピアソンは考えています。当時の英国のほかの地域で発見されたものとは比べものにならないほど大量の動物の骨や陶器が見つっていることが、その証拠です。

この場所で見つかったブタの歯を調べたところ、生後 9 カ月だったことから祭儀は冬至に行われたと思われる。

パーカー・ピアソンによれば、祭儀の後に人々は道を通してエーボン川に向かい、死者をストーンヘンジ遺跡に向けて流しました。それから人々はストーンヘンジの道を通して巨石記念碑に向かい、数人の死者を選んで火葬にして埋葬したのです。

ストーンヘンジ遺跡は、先祖を敬うこれらの人々にとって、死者の霊と交信する場所だったのです。

ダーリントン・ウォール遺跡の道は川の向こうにある崖に続いています。

「彼らは人の灰や骨、そして死体そのものも水に投げ入れたのでしょう。これはほかの川でも見られる風習です」とパーカー・ピアソンは言います。

パーカー・ピアソンとトーマスは、ストーンヘンジは祖先をまつための記念碑として石で造られましたが、ダーリントン・ウォール遺跡は木造だったと見えています。

ダーリントン・ウォール遺跡は「住むための場所でした」とパーカー・ピアソンは言います。

それに対して、石造のストーンヘンジ遺跡は、人が住むためではなく、その当時のブリテン島で最大の墓所だったので。ストーンヘンジ遺跡では 250 件の火葬が行われたと考えられています。

ストーンヘンジ・リバーサイド・プロジェクトは、マイク・パーカー・ピアソン(英シェフィールド大学)、ジュリアン・トーマス(英マンチェスター大学)、ジョシュア・ポラード(英ブリストル大学)、コリン・リチャーズ(英マンチェスター大学)クリス・ティレイ(英ロンドン・カレッジ)、ケイト・ウェルハム(英ボーンマス大学)の 6 人が中心となって行われました。

このプロジェクトは、ナショナル ジオグラフィック協会と芸術人類調査協議会が資金を援助し、英国遺産、ウェセックス考古学会の支援により行われています。

【 参考 4. 】

山本哲三さんのホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tetsuzan/web/megali.htm> より

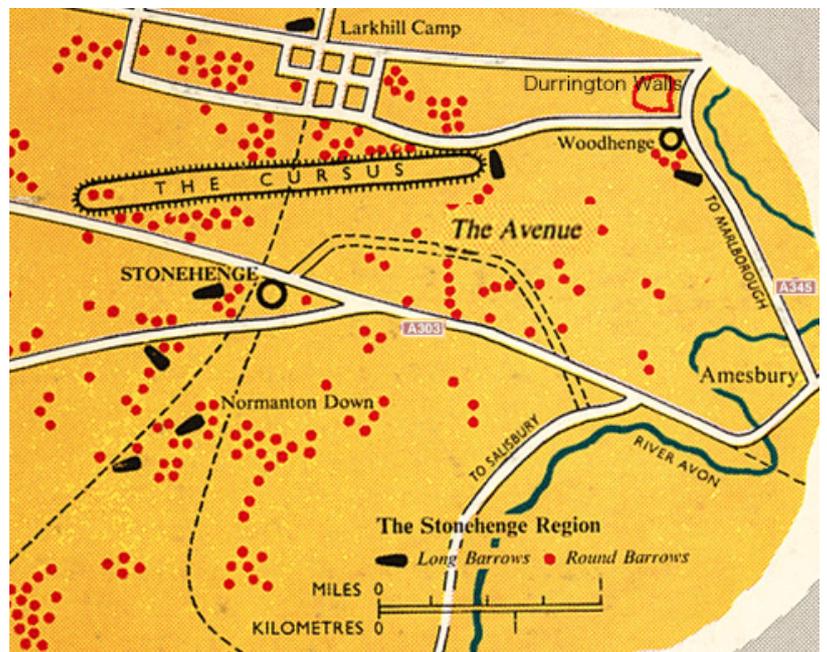
● (2007 年 1 月)新聞記事によれば、「紀元前 2600～2500 年頃の大規模な住居跡を発掘、ストーンヘンジを造った人々の住居跡を発見」とありました。

それによると、ソールズベリー平原にあるストーンヘンジ地域のダーリントン・ウォール(地図に発掘現場は写っていませんが、ストーンヘンジから3km ほどのところ。衛星写真では何となく円形の形が地上に見えます。)で発掘調査により、数百人規模が居住していたとみられる古代住居の跡が発掘されました。

調査を行った考古学者は、ストーンヘンジを造った人々の住居跡とみています。その近くにはウッドヘンジがあります。

これらの住居は、発掘品の放射性炭素測定の結果、ストーンヘンジ遺跡が建造されたのと同じ紀元前 2600～2500 年のものと分かりました。このことから、ダーリントン・ウォールで発掘された住居に住んでいた人たちがストーンヘンジ建造に関わっていたと調査隊は結論づけました。

そして、それらの人々がストーンヘンジで何をしていたかが推定されています。



(ストーンヘンジ周辺の概念図、アベニューは点線で表示されている。

グーグルの衛星写真で見るとアベニューは牧草上に平行線として確認出来る。また、土饅頭のような丸い盛り上がりなど周辺を見て行くと色々発見できて面白い。)

ダーリントン・ウォール環状遺跡には、新石器時代にあらゆる地域の人々が集まり、大がかりな冬至の祭りが行われて、大量の食料を消費したようだ。それは、当時の英国のほかの地域で発見されたものとは比べものにならないほど大量の動物の骨や陶器が見つかったことが、その証拠だと言うのです。この場所で見つかったブタの歯を調べたところ、生後 9 カ月だったことから祭儀は冬至に行われたと思われます。

調査隊のリーダーのパーカー・ピアソンによれば、祭儀の後に人々は道(アベニュー)を通してエーボン川に向かい、死者をストーンヘンジ遺跡に向けて流しました。それから人々はストーンヘンジの道(アベニュー)を通して巨石記念碑に向かい、数人の死者を選んで火葬にして埋葬したのです。

ストーンヘンジ遺跡は、先祖を敬うこれらの人々にとって、死者の霊と交信する場所だったので。

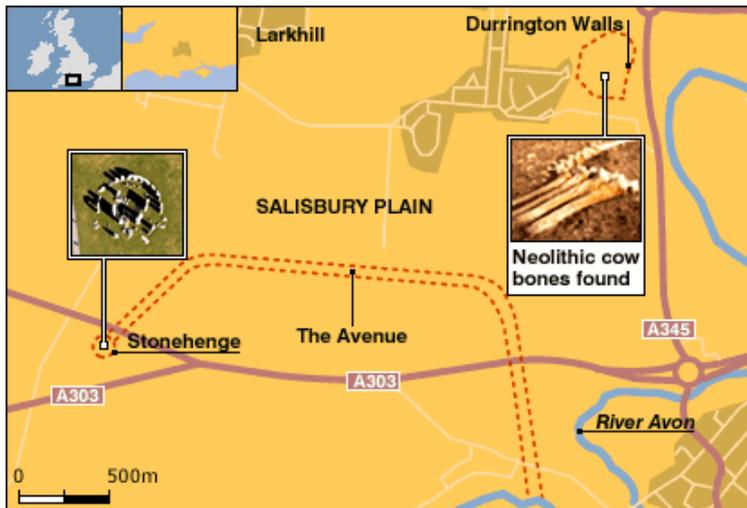
ダーリントン・ウォール環状遺跡の道は川の向こうにある崖に続いています。「彼らは人の灰や骨、そして死体そのものも水に投げ入れたのでしょう。これはほかの川でも見られる風習です」とパーカー・ピアソンは言います。

パーカー・ピアソンとトーマスは、ストーンヘンジは祖先をまつための記念碑として石で造られました。ダーリントン・ウォール環

状遺跡は木造だったと見えています。ダーリントン・ウォール環状遺跡は「住むための場所でした。」とパーカー・ピアソンは言います。それに対して、石造のストーンヘンジ遺跡は、人が住むためではなく、その当時のブリテン島で最大の墓所だったのです。ストーンヘンジ遺跡では 250 件の火葬が行われたと考えられています。

ストーンヘンジは大規模なお墓であった。と結論されたとしても現在の墓所と同じ単一な意味で考えることは出来ないでしょう。太陽の観測所と言う施設と言う単一な考えもまたあたっていないようにです。当時の人々の精神世界の結実したモニュメントとしてストーンヘンジはあるのですから。

余談ですが、発掘調査の写真をみると地面が白く写っています。これはこの辺りも地層が白亜、チョークだとわかります。ホワイト・ホースが描かれている場所もチョークの地層です。



「紀元前 2600～2500 年頃の大規模な住居跡を発掘、ストーンヘンジを造った人々の住居跡を発見」とありました。それによると、ソールズベリー平原にあるストーンヘンジ地域のダーリントン・ウォールで発掘調査により、数百人規模が居住していたとみられる古代住居の跡が発掘されました。

調査を行った考古学者は、ストーンヘンジを造った人々の住居跡とみています。その近くにはウッドヘンジがあります。

これらの住居は、発掘品の放射性炭素測定の結果、ストーンヘンジ遺跡が建造されたのと同じ紀元前 2600～2500 年のものと分かりました。

このことから、ダーリントン・ウォールで発掘された住居に住んでいた人たちがストーンヘンジ建造に関わっていたと調査隊は結論づけました。

そして、それらの人々がストーンヘンジで何をしていたかが推定されています。ダーリントン・ウォール環状遺跡には、新石器時代にあらゆる地域の人々が集まり、大がかりな冬至の祭りが行われて、大量の食料を消費したようだ。それは、当時の英国のほかの地域で発見されたものとは比べものにならないほど大量の動物の骨や陶器が見つかることが、その証拠だと言うのです。この場所で見つかったブタの歯を調べたところ、生後 9 カ月だったことから祭儀は冬至に行われたと思われる。

調査隊のリーダーのパーカー・ピアソンによれば、祭儀の後に人々は道(アベニュー)を通してエーボン川に向かい、死者をストーンヘンジ遺跡に向けて流しました。それから人々はストーンヘンジの道(アベニュー)を通して巨石記念碑に向かい、数人の死者を選んで火葬にして埋葬したのです。ストーンヘンジ遺跡は、先祖を敬うこれらの人々にとって、死者の霊と交信する場所だったのです。ダーリントン・ウォール環状遺跡の道は川の向こうにある崖に続いています。

「彼らは人の灰や骨、そして死体そのものも水に投げ入れたのでしょう。これはほかの川でも見られる風習です」とパーカー・ピアソンは言います。

パーカー・ピアソンとトーマスは、ストーンヘンジは祖先をまつための記念碑として石で造られました。ダーリントン・ウォール環状遺跡は木造だったと見えています。ダーリントン・ウォール環状遺跡は「住むための場所でした。」とパーカー・ピアソンは言います。それに対して、石造のストーンヘンジ遺跡は、人が住むためではなく、その当時のブリテン島で最大の墓所だったのです。ストーンヘンジ遺跡では 250 件の火葬が行われたと考えられています。

ケルトの象徴であるうずまき

(中西)

キリスト教とは異なった転生思想と靈魂不滅の考え方が秘められたうずまきの謎

http://www.eikokutabi.com/ukwhatson/uk_guide/features/celt/uzumaki.html より

■ うずまき

アイルランドのニューグレンジ (Newgrange) やイギリス・コーンウォールなどの巨石遺跡にはうずまき模様が施されているものがあります。これらはヨーロッパにある巨大な石の建造物と同様、紀元前 3000 年前、ケルト文化以前に建造されたものです。宗教的な遺跡だと考えられていますが、作った人々がどんな民族だったかはよく分かっていません。

後にこれらの地にやって来たケルト民族は、巨石遺跡には妖精が住んでいると考えました。

複数の立石に石の屋根をのせたドルメン (dolmen) や円状に並べられたストーン・サークル (stone circle) は、何か不思議な感じを漂わせています。ケルトの人々はここに妖精の存在を感じたのでしょうか。

うずまきは古代から偉大なる母親の子宮の象徴

うずまきには、生まれてくるという意味とそこに引き込まれて死ぬという二つの意味を持ち、

まさに輪廻転生を象徴

— 心理学者 河合隼雄氏による —

日本の縄文土偶の女神にもうずまきが描かれているものが多く、世界中で守護神にはうずまきの文様が彫られている。

うずまきには、指でたどっていくうちに、もう一つの世界 (another world) に迷い込むという言い伝えが残っている。

ケルトの人々が見るもう一つの世界とは？

もう一つの世界—ケルトの転生思想

1 世紀ローマの詩人ルカヌス (『内乱記』) によると、ケルト民族は「死とは長い生の中の中間点にすぎない」と考えていました。戦場で命知らずの戦いぶりも、ケルトの人々のこうした死生観にありました。

死者の霊はギリシア神話のような陰鬱な冥界で亡霊として存在するのではなく、肉体を持って異界で生き続けるのであり、これがケルトにとっての異界、もう一つの世界 (Another world) なのです。

異界は丘の中や西の海の彼方にある。

異界とは目に見えない美しい世界で、目に見えない人々が住んでいると考えられていました。

これが妖精伝説となって今でも多くの物語が伝えられています。

またケルトの神話や伝説には、人間が動物に生まれ変わったり、神が英雄に、英雄が妖精と結婚したり、妖精が人間の子供を産んだりするなど、神、人間、妖精がぐるぐると転生します。

つまり人間の生命と自然の生命とは密接な関係を持ち、大きな生命として、ぐるぐる回っていくのです。

■ ケルトの代表的文様

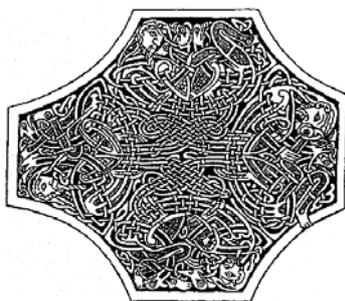


図2 ケルティック・インターレース

図2 ケルティック・インターレース
組紐文様

図3 ケルティック・スパイラル

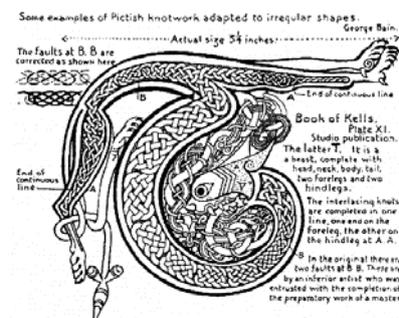
図3のケルティック・スパイラル
渦巻き文様

図1「ケルズの書」結文字下の怪獣

図1 ズーモルフィック・パターン
動物文様

渦巻模様では

「トランペットパターンと呼ばれる繋ぎのパターンによって、次から次へと複数の渦巻が入れ子状に配置され、相似形の渦巻が永遠に小さくなりながら無限に続いていくように見える。

そこでは、パターンがひとつの渦巻の外周から発してもうひとつの外周へ流れ込んで行き、あたかも渦巻の激しい旋回のエネルギーをそのまま受けとめ、少しも失速させることなくつぎなるものに伝えるという、きわめて動的、すぐれて柔軟なはたらきをしている。

それは原子のスケールから大宇宙のスケールまでを一挙に同じ明瞭さでみさせる有機的な文様の集合となっている」。

また、組紐模様では

「複雑性、細密性、緻密性、多様性、誇張性、色彩性、曲線性、活動性、大胆性、変転性といった装飾的造形に必要とされる全ての要素に満ちた組紐模様が、わずかな隙間も許さずに空間を埋め尽くす。

そして、そこには見かけとしてはパターンの反覆をみせながらも、実は制作のプロセスで逆に同じ手法の反覆を最大限に回避するという、ケルト得意の装飾トリックが見られる」。



■ ケルトとは・・・

「ケルト」というのは、いくつかの見方がありますが、

1. 地中海のギリシャ・ローマ文明に対するアルプス以北の北方文明であるというのが一つ。
 2. キリスト教が入って来てからの中世ヨーロッパの世界観から見ると、キリスト教の世界に対立する異教的な伝統文化を持っている文化文明である。
 3. 近世・近代になりますと、イギリスやフランスという近代的な社会をつくり上げていった「中心」に対して、非常におくれた周縁の地域
 4. 「ケルト」文明の四つ目の側面として、ユーロアジアつまりユーラシア大陸 インド・ヨーロッパ比較言語学の体系の一員である人たちの中で最も極西人たちが形づくった文化としての位置付け
インド・ヨーロッパ世界の一番極西部をしっかりと保っている文化
 5. ユーラシア大陸の極西から極東までの文明の関係、交流というものの一端を担う文化
ユーラシア大陸の中で人たちが交流し、それぞれの文化を育てた。したがって その底には共通の意識があり、それは今の時代にもつながっている。
- 縄文の渦巻きとケルトの渦巻き ユーラシアの両端で 場所も時代も超えて その文様に「生」と「死」 転生思想と靈魂不滅への思いが込められている。 渦巻き文様は 今も時代を超えて 共通性の発露として人々をひきつける。我々が 縄文の渦巻き文様にひきつけられ、気持ちが安らぐのもその為であり、自然に繰り返し描かれるのもそのためだろう。
 - ケルトは鉄器文明 縄文は石器文明



ケルト人の分布

- - 紀元前 1500 年から紀元前 1000 年
- - 紀元前 400 年

古代の巨石遺跡を巡ってみよう！

イギリス・アイルランドに数多く残る、謎の多い先史時代の巨石遺跡。ケルトの人々も同じ光景を見ていたはず。19世紀には巨石遺跡とケルトは結びつけて考えられていました。現在ではケルト伝統儀式の模倣が行われることも。ケルトの人々のように想像力を働かせて、遺跡を巡ってみると新しい発見があるはず。

■ ニューグレンジ(Newgrange)

ダブリン北のアイルランド東部のミース地方に位置する、紀元前3000年前ごろの新石器時代後期の古墳。墓と通路から成り、周辺には謎のうずまき模様が刻み込まれている。

ケルトの人々には妖精の墓とされてきた。

ケルトの女神伝説の舞台でもあり、想像力を刺激されるアイルランドを代表する世界遺産



■ バレン高原(The Burren)

アイルランドの南西クレア地方に位置する。バレンとはゲール語で「石の多い場所」を意味し、この地域は石灰岩が多く広がる。そのため「巨人のテーブル」など巨石遺跡ドルメンが多い。他にも古い教会、修道院跡など、さまざまな時代の遺跡も残る。



■ キャロウモア古代遺跡(Carrowmore Megalithic Cemetery)

アイルランド北西部のスライゴー(Sligo)の新石器時代の古墳。ニューグレンジよりも古いと考えられており、注目されている。周辺にも数多くの墓が点在し、発掘がされていないものも多い。



■ メン・アン・トルの石(Men-An-Tol)

イギリス・コーンウォールの最西の地方ペンザンス(Penzance)北部の有名な石。2本の立石に挟まれたドーナツ型の石は「悪魔の目」と呼ばれてきた。石を回すと病気が治るとか、子宝に恵まれるなど伝説も多い。



■ ストーンヘンジ(Stonehenge)

南イングランドのソールズベリ(Salisbury)の小高い丘陵にある。紀元前3000年から紀元前1100年にかけて、段階的に建造された。ローマ人の神殿や、アーサー王伝説の魔術師マーリンが造ったとか、ケルトの蛇神殿、古代の天文観測センターなど数々の伝説が残る。夏至の日には、ケルト伝統的祭の模倣が行われる。



■ エイブベリー(Avebury)のストーンサークル(Stone Circle)

イングランド最大のストーンサークル。南イングランドのエイブベリー(Avebury)に建立され、ストーンヘンジより古いとされている。



2009.9.5. 夕 青森山内丸山縄文遺跡 お月見祭り

ケルトと縄文の渦巻きの文化・共通性のシンポがありました